



ニッポン  
ドクター和の

# 臨終図巻

長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

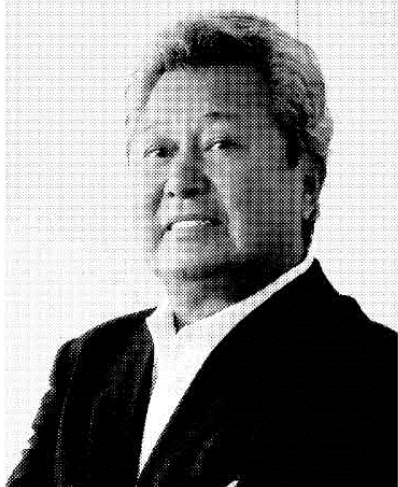
と久しぶりに並んで釣り糸を垂らしているのでは。

「骨だけがバラバラになって出てきた。悲しかった。人間ってこんなに簡単なものなのか……」  
盟友・松方弘樹さんが亡くなった際、声を震わせてそう語った姿が今でも焼き付いています。

あれから約3年。12月12日、俳優・梅宮辰夫さんが旅立ちました。享年81。死因は慢性腎不全。発表では、神奈川の病院で死亡とのことですが、実際は真鶴のご自宅で朝、静かに息を引き取られたようです。そこから病院に運ばれて死亡確認となったのでしょうか。

死の前日まで透析を受けており、その病院から自宅へ帰る車中、海を眺めて「天気がいいなあ。釣りがしてえ」と話していたとか。今、あの世で松方さん

## 136 俳優 梅宮辰夫



梅宮さんは今年1月に、自身6度目のがんとなる尿管がんの手術を受け、その後、慢性腎不全と診断。2月から人工透析になりました。慢性腎不全とは腎機能が徐々に低下した状態。透析治療で延命をしても、いつか限界が訪れます。

訃報には、壮絶死のような見出しも散見されますが、直前までおしゃべりができて、大好きな海の見える家での旅立ちですから、見事な平穏死でしょう。それを支えたのが、娘のアンナさん(47)の存在。お父様が旅立ったその翌日、アンナさんはブログにこう綴っています。

「家族皆んなで、日々最善を尽くす日々でした。父の変わりゆく姿に何度も泣いた」  
頼もしかった父・辰夫さんの老いと逃げずに向き合われた、アンナさんの努力に拍手をしたい。

載せた詩を少し紹介しましょう。

「親が老いていくということ。それは、萎んでいくこと。小さくなっていくということ。小さくなって軽くなって、それでもあなたの親であるということ。親が老いていくということ。それは、お別れの日が少しずつ近づいているということ。親がどんなお別れを望んでいるのか、察してあげること。あの世とこの世の境目が、少しずつ曖昧になってくるということ。親が老いていくということ。それは、命の仕舞い方をあなたに教えてくれているということ。

あなたもいつかこうなるのだと、それは最後のプレゼント」  
辛い介護経験もたくさんしたことでしょう。それでも、最愛のお父様と過ごせた日々は、命のバトンという貴重な贈り物です。落ち着いたらアンナさんの言葉で、「親の老いの受け入れ方」を同世代の方々に語ってほしいと願います。

# 命のバトンを娘へプレゼント

親の死はもちろん、老いさえも受け止められない子どもは多く、そのために在宅医療がうまくいかないケースを時々経験します。そこで私は、40〜50代の子供世代に向け「親の老いを受け入れる」という本を出しました。本書に